溪雲和歌集

全

富尔四号

特別
イ4
3163
39

貴
14
3163
39

そもそもやまとことばの国いにしへよりおこりて人乃
世にあるひとことのはやまとだましひにとどまりけるなり
にほひまさりかをるは美を集たる紅をたつまことにかな
なるべきあらをまことのすけ
たるべきあらをまことのすけ
推るに実物なれば有るべんいにしへよりいまだきかざるを
いひ出れいみちびくにかかはらぬ名をおこすべきあるし
おほのなるこの千載新古今れうよりいまだひまなる清次
ちをのかつきうひ清まるくまもるに記実焼太刀乃なまを
ちきわさをるるこゝろ月雪花のあかきあはれ
まくるかくしけなき天地雪弁花沸もてあそびのこ
あてとうこゝろやすかるふまれくるくるを寛永といふる

序一

あるこゝろにはかりをこの乃うみ波をつゝふいつてはなるものに
なりておの乃神ちこゝろのもはこゝろつけはこゝろ
ちむ事にをりてこゝなむのまををうこゝにわこゝり
三十文字あまり一文字このあるもこゝろあかこゝろ
ゆこゝぬこゝにいれこゝろ人よ青ん青柳新古きこゝろ
こゝのこゝをこゝよりこゝ清ちやこゝり記をたつまこゝさこゝのかこゝを
よまこゝをこゝとおこゝこゝ都よひまこゝとこゝまこゝひて雲あ乃
くあこゝちこゝ雲こゝ藤こゝ川こゝ河こゝの藤こゝは火乃光こゝ
きよ紅法の雲こゝ乃ふまこゝとおこゝけあきみこゝほこゝあり
なのこゝさこゝいはこゝまこゝいこゝ抱わこゝれこゝちこゝをこゝゆる水乃
ゐ雲れい記こゝ古こゝの耳こゝとこゝむ乃こゝまこゝこゝこゝこゝあこゝう

[illegible]

[illegible]

溪雲軒和歌集

春部

歳中立春

立春

立春水

水郷立春

関路立春

初春

早春水

早春水

試筆

野子日

子日祝

連峯霞

嶺霞

橋邊霞

河霧

海邊霧

浦霧

湖霧

孤島霧

里霧

霧満村

篤

杉間篤

竹間篤

田巣篤

篤生谷

山家篤

佛家篤

名所篤

朝篤

毎朝聞鶯　[illegible]

鶯為友　[illegible]

鶯音春友　[illegible]

求若菜　[illegible]

野若菜　[illegible]

春氷　[illegible]

谷氷寒　[illegible]

橋名春久　[illegible]

春到管絃中　[illegible]

春笙人意中　[illegible]

梅風　[illegible]

霞暖梅開　[illegible]

月照梅花　[illegible]

若木梅　[illegible]

折梅　[illegible]

古宅梅　[illegible]

里梅　[illegible]

谷梅　[illegible]

谷底梅　[illegible]

二月雪底　[illegible]

垣根殘雪　[illegible]

柳　[illegible]

朝柳

岸柳

水堂柳

水堂古柳

行路柳

柳垂糸

若草

雨中春草

磯春草

沼春草

春月

関春月

春月朧
春曙
江春曙
峯早蕨
春駒
海空春駒
夕春雨
谷春雨
帰雁

遠海雁
帰雁遠
暁海雁
海空海雁

初今年日よりとなりて
志賀の海むかしを恋ひ
暁ほのあけぬ春の

[illegible]

待花
漸待花
曙花
對花

[illegible]

四野

[illegible]

花下志願
[illegible]

折花

山花

山ものとあもむる物も多れば久しく玉の枝なるべし

うの山せゝふる雪乃色ゝ春乃色ゝ高ゝ見ゆ乃方ゝ白し

吉野山花の枝ゝより咲そめて裏ゝ白ゝ雪ゝ乃如ゝ

松花

高砂ノ尾の松もあらんせよ松ゝ山ゝ雪ゝ乃如ゝ

山家花

ゝゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ里ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ花ゝ

遠里山花

うの山裏ゝ乃如ゝ枝ゝを見わたせば春ゝ乃ゝ雪ゝ乃如ゝ

社頭花

みつゝ垣乃久き世ゝうゝ咲そめて神もを乃の山桜ゝ哉

野花

やわらぐる光ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ姿ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

樵路花

いさゝゝ乃ゝ山ゝ路ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ雪ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

花衣

ゝゝ乃ゝ里ゝ乃ゝ春ゝ乃ゝ雪ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

立ゝ乃ゝ衣ゝ乃ゝ袖ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

花色

世中ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ心ゝ乃ゝ色ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

花重

山ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ重ゝ乃ゝ雪ゝ乃ゝ

風ゝ乃ゝ花

うゝ乃ゝ世ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ心ゝ乃ゝ風ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

落花

咲ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ落ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

花半落

ちゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ半ゝ乃ゝ落ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

世中乃ゝ人ゝ乃ゝ心ゝ乃ゝ風ゝ乃ゝ

落花満庭

落ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ満ゝ乃ゝ庭ゝ乃ゝ

暁庭落花

落ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ暁ゝ乃ゝ庭ゝ乃ゝ

花浮水

落ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ浮ゝ乃ゝ水ゝ乃ゝ

橋落花

落ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ枝ゝ乃ゝ橋ゝ乃ゝ

山家藤花
三月三日
籬外鶯
雲雀
野徑雲雀
苗代
路苗代
苗代蛙
夕蛙

田蛙
雉
沼杜若
歌冬
河歌冬
橋色歌冬
離歌冬
里歌冬
巖躑躅
紫藤

池霞
社頭霞
古寺霞
殘春少
暮春
暮春霞
暮春水
春夜
春海

池水霞ひろくひろくなりて春の日の山の端のめぐりをもとほくとほくまで霞たちこめたる夜の景
松の梢のかすかにうごくと見えて霞たちこめたる夜やむしさびの雲の林乃法のもゆるさ
春ふかみ霞たちこめ咲ほこる花やいつとも知ぬ山の端
春ふかみ霞たちこめ鶯の鳴ぬ駒をたづねぬ
春ふかみ霞の下に花を契る松の木の下
春ふかみ霞の奥も早淀河よりすぬ水の春の夕
梅の花あらぬ春の夕の風まれに
春ふかみ霞の奥の梅の香を月に袖ぬむ春の夕
海辺夜の春の夕の風に袖ぬれて波の花の春の夕

溪雲軒和歌集春部畢

溪雲軒和歌集

夏部

首夏風
杜首夏
更衣惜春
朝更衣
新樹
園新樹
卯花
路卯花

首夏風
若葉のうへに梢涼しくなびかせる南の風
杜首夏
若葉の深山もとをぬきのうへに杜鵑なく夏の
更衣惜春
夏ぬるるかをりおしむ袖の香乃袖
朝更衣
卯の花の雪かとまがふ袖の香乃袖
新樹
ひと枝の梢の緑ひろがりて袖の香乃袖
園新樹
ひと枝の梢の緑ひろがりて袖の香乃袖
卯花
卯の花の雪を思ひてまくらぬぬるる小堅の雪
路卯花
卯の花の雪を思ひてまくらぬぬるる小堅の雪

卯花隠路　姫ゐ[illegible]　[illegible]乃雪[illegible]　[illegible]卯花咲る小路[illegible]細[illegible]

榊葵　神まつるをりにあふひ[illegible]かけてうら[illegible]読人

賀茂祭　[illegible]乃かさ　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]　[illegible]乃[illegible]

郭公　[illegible]

侍郭公

郭公類

郭公函

山郭公

[illegible]

嶺郭公

岡郭公

原郭公

里郭公

杜郭公

関郭公

早苗

[illegible]

里樗
菖蒲
刈菖蒲
池菖蒲

江菖蒲
蘆橘
夕蘆橘

橘薫枕
五月雨

溪五月雨
河五月雨
橋五月雨
古宅五月雨
五月雨晴

水鶏
夜水鶏

泊水鷄

霧河

深夜霧河

澎霧河

雨後霧河

照射

連峯照射

夏月

浦夏月

江空夏月

夏月易明

砂月夏

庭瞿麥

夏草

深夏草

雨後夏草

岡夏草

陳家牧羊

江蛍

新緑の川のうへひく蛍火をはらへてやはらかるる

深蛍

みちのくの浅香山より新あらはまて蛍をふかり

橋蛍

橋姫の神の夫の宮やはらむん蛍みてを宇治の河つら

蛍火透簾

玉たまの玉の簾のけ四とみ花ふ重ね蛍の点ひらふ

夕新

咲花の点をへめ巻る指をひく琴てむきうへ霧の夕新

垣夕顔

たそかまの垣のやへ紀有のまをかきに咲る志めゆ思ひ夕新のむ

池蓮

月やとるひかりをあらはしてあるしなくて紀ゆるを仏ぬ池のをちをを

遠白雨

夜れ貴の夕をうふ弟ふををちて夕立を白雨貴れをちかる

野夕立

夕立ふ野をかをふ色やかてをれ野ふ紀のををう

夕立過

山のをふ紅ををてを夕立れをまり紀の風のすりを

市夕立

簾笠をかるまの市めふ有四むを四ふ紀ゆふ村を

夏紀

松下水

むすふを水に岩もるみの涼さい武も強ぬ一松の下陰

納涼

松陰の岩をたををて池ゆふ橋ふも涼夏の有の月

涼ををせを文れおとに流はふ断ふまを紀村ゆ雪ゆ岩

納涼風

みちの紀庭の木陰ふ海をゆる涼をあゆ袖の夕風

水色納涼

ひを春れ村やをとをふと風の涼をあゆ松乃ち陰

ちを雪れいまを紀村ゆ岩ゆりわをて一ふ武春涼さ

樹陰納涼

涼さいををうこをりをを張ふ糸をあをう梅ふ河ふ

月前納涼

ゆ武巣も動ぬ夏武無ゆをおを小村ふなを武下陰

船納涼

世ゆを志ぬ村やをりをを桃の小松風涼月武をぬい

松下暁涼

ゆをゆを一八月のふ武梓をて涼をゆふぬ糸の追風

あ川ゆ月をを武ふ梅ふ涼をあゆ袖乃夕風

扇

国扇風

杜鵑

樹陰蝉

河蛍夏稜

夏稜

夏野

夏川

夏湊

秋部

立秋

早秋朝

早秋扇

初秋

初秋風

初秋暁

浦初秋

初妹山

七夕

待七夕

七夕雨

七夕霧

七夕草花

七夕橋

秋きて

七夕舟

七夕枕

七夕衣

七夕弓

名所七夕

二星逢

閏月七夕

七夕別

七夕後朝

萩風
月前萩
江萩
軒萩
萩半繊
野萩
萩漸盛
萩露
鹿交萩
野蘭

いつよりか人の思ひをさそふ秋風の吹きてはひらひらと萩原
さらしける萩のうへの露の月新
萩の葉のはらはらもさびしき夕の月の入る
西の方の入るかたの山の端の月の入る
いつもむる庭の枝のもとにて露のさわぎ侍るの萩の上風
今いくつちるかと思ひつつ秋ごとに咲うむる庭の萩原
聖堂の露の色もきえぬ萩の葉の玉の神も鏡とたちぬる
らふかまくらの枝よりおきて萩の葉の玉の響をのびぬ
いはのうへの玉の枝とやくいんものちりぬ萩のさらつゆ
秋萩の色に分れてをくつゆ玉の涙と庵や呼ぶらん
ぬきかはぬ色ぬるさ露の姿ちぬ侍ぬ物の風よ絶ひやさん

女郎花
薄露
原刈萱
槿
露底槿花
露
往露
草花露
盂蘭盆
秋田
秋田風

白露は玉ぬきしきおくらん白玉ぬきしきおくらん
色ぬきしきおくらん白玉ぬきしきおくらん
なくとなく露もちりぬまそかりの神の露ぬきしきおくらん
かつきぬるまかりの露も変はせよとてうるはのさらの
身をつきぬ少なくとなく秋の色ぬるかりの露の色
なるまの月の色ぬるかりの露やおちてよ秋のむよをうん
ぬるさのうつりちあれかるく松の葉に秋露ふるにて
むさぶ野やもれ錦のはらはらもかきりちらぬ露の名
なぬ人の葉の秋と思ふと白露の玉ぬきやうや庭の萩原
時を見てくるるを民の秋なびやや小田の秋の名風
秋を嫌ふ人の秋なる物いとまあ他門田ひらを風まをて

秋野

虫

夜虫

露底虫

虫聲隨風

秋三

雨夜虫

旅宿虫

草虫

時雨虫

虫聲濃

園虫

虫為夜友

虫聲非一

松虫

雁

初鳥
初聞鳥
近初雁
遠初雁
芦雁
江月聞鳥
鹿
野鹿
原鹿
杣鹿
海辺鹿

夕鹿
野鶉
鴫

霧晃鴫
秋風
澤秋夕
山家秋夕
河霧

堤上霧

古渡霧深

霧底筏

駒迎

朔駒迎

月

十三夜

歌月

池月久明

池月添光

月前萩

月前菊

月前猿

月前松

月前猿

山月明
・よそにみし海をよりゐる月影に峯みちさして忘れぬ

山月
・月影はむかしの石山やむかし此秋をわすれさるらし

海辺月
・いくちさと海にかゝる月影にぬれてもしほたるゝ浦人

浦月
・藻塩くむ袖にやとして秋の夜は月にほさぬ袖の浦人

嶋月
・浦風に雲吹はれて八十嶋の外まて見ゆる月のさやけさ
・まつあるゝ海もさそはてよるや雲晴やうてられけり松の浦島

湊月
・うきて見ゆる玉藻に秋の海の月影ある秋影そかゝる

浦月
・志賀の浦や月影さえてあしたの海にてなきさの霜やおく近

汀月
・いさらなみ光をそへし難波潟よるは月にて千鳥なく浪

江月
・新やとさへすむ川のせに来よいく秋の月のしるしに見る江の月

水郷月
・秋をしる人をつれてとほる里よりはいかにものゝなかにもつる河波

澤月
・鴫乃たつ沢辺の八月の影やとりきて沢もなきぬ秋の夜の沢

岡月
・月影は須磨にかよへる岡よりや上るもみえぬ岡辺の宿

瀧月
・いは走る水に玉散て清瀧川の月うつりてや流れぬ

池月
・くもりなき影をうつせる池の面にちよまつかけの秋の夜の月

谷月
・峯よりはいるかとみえし谷の戸に影そ見えける月やさしえん

江上暁月
・たれかある夜もすからに近江の海に名残をしきは江乃月

閑路惜月
・出る浦やなかなか光そふ影をとゝむる月をさらにむる関守のある都

橋月
・なかなかに世に照る月の影のこすなる橋のあさきし
・寄せくる波にかゝる月影のつきせぬやそこに見る久米の岩橋

橋邊秋月
・宇治河や瀬々の橋姫かたしきの袖にかゝれる波の月かけ

禁中月
・海山の秋もかよはし九重の雲の上人そみる月をさらに見る

社頭月
古寺月
山家月
月催涙
月契秋
船中月
名所月
月似鏡
十三夜

いかなりけやきかるらん秋の月ぬきうるまこの庭
こよのみてなりれもさよ紀貫はれ光をそこの月やどん
寺鐘の鐘をれかなせぬ夕霧の月池のほる岸の松風
雲さらふあしぬ山の嶺もとる松のこと雪をもとる月新
やしひてし世のうさ忘るのんふまるるみ月新
紫秋もやらなるまたる月新れ松るまに袖のおこ雲
ひの紅ら紅御代いろもせるのしよ月ハなるあ秋と琴て
月ふと八十路をとく清出て海ちるあぬくれとる袖の
天河月をかかれ梅ら種すの片盤をるて石をひるよ
むらいる月ぬ月みの光ふ月ひ世れ秋ろ久ー池
名ふたりきなるるの秋月市よりも狂沈海さる毛月ぬ毛

搗衣
搗衣寒
搗衣到暁
隣搗衣
海辺搗衣
田家搗衣
野外

南きこの夜をほるを志禮てうるもを志ビさて面る松まぬ夜
秋姫ゝ松空ぬ搗を自ぬ代ろもうれ海ゝ茅ゝ宿
藤ハ波よ枕よ秋ゝくちをハ海る風も松空ぬ衣うれ
かゝころを暁ら空てうちを藤ぬ里ぬ松空を浦る秋風
うれ寄もよみるるもろ笑面ゝ垣を屋ゝ列る松まぬ徳ハ
波ます波ハさもゝ暁屋の浦風波ゝ海ゝ衣ゝうぬ松ゝ形
晩稲ゝ山ぬ代ゝ面ゝ寄ゝて河の海ゝ屋ゝ衣ゝ列ゝ
秋ぬ代ぬ山ゝうゝん海ゝ第ぬ寒暁ゝ衣ゝ寄ゝ代ゝ世ゝ
暁ゝ海る世ゝ代ゝ風ゝ寒ゝ寄ゝ村面ゝ松ゝく寒ゝ寄ゝ志ゝビ

九月九日
菓

ゝ月ゝあゝ人ぬ代ゝ人ゝ代ゝ毛月ゝ寄ゝ代ゝ世ゝ列ゝ毛
いゝゝよぬ代ゝ菓ぬ松ゝ志ゝ菓ぬ代ゝ志ゝ垣ゝ寒ゝ寄ゝ代ゝ

栽菊
河邊菊
水邊菊
仙家菊
菊露
紅葉

山路よりうつして植し白菊の花やちよまでん宿の垣ねに

志ら菊の花の陰ゆく山河乃水の淵のふかさやは河る

むさし野の菊の香句ふ河水乃末くむ人やちよもへぬ覧

仙人のすみこし川ぞと分入てやまぢも志らず白菊

あさ日さすかな露さへ光あり白菊の盛久しきぞや老せぬ

ますみにうつす鏡か紅葉の陰がくれもの千代の里

ちる露や神のこずゑも向山もみぢの錦きよらなるらん

もみぢ葉もきのふは薄き紅の山時雨にや深く染らん

山姫の心乃色も深けれどまだてりとまさる海のさびしきみちを

陰うつす峯のもみぢを流す瀬河中なる秋の錦ならん

立田姫もみぢを染て流すらん紅の色を志ぐれなるらる

嶺紅葉
山紅葉
峯紅葉
園紅葉
古寺紅葉
流紅葉
紅葉處々
紅葉如錦

もみぢ葉の紅深くそよ露時雨いまはあらしも人も待らん

ふもとにはいまだ色ぞ無嶺はいまだわかで時雨の染るもみぢ葉

深山への嶺より嶺のもみぢ葉に河瀬にそめてわた入山乃秋のもみぢを

もみぢ葉も御幸待てふ小倉山その一しほと時雨ふる頃

紅葉さへ紅は志るしさゞめや小倉山路幸ぞまちにしきぬきむかふ路

龍田姫は志ぐれそめて流すらん紅葉錦をたてぬみちを染

河さえ深くそよぐ時雨のまでもさまざまにやしけの花のもみぢを

むさしのの野原の秋は程もなくもみぢはやちしほなるらん

山姫の染てかさねぬもみぢ葉の錦をかくる瀧の白糸

山姫の心わきてやそめぬらんちもとめらむ色のうひなるらん

紅葉ちる峯には谷に山姫の手染の錦しきぬ山のなみ

紅葉深

いくしほはそめてはやむる立田姫おのかそめしもちらしにけるかな

暮秋

わしとおもふこゝろもかなしおくれしまゝ秋の道たとるまて

くれ行秋のなこりとおもふやらん風にもみちと霜の白菊

暮秋雲

立田姫袖のわかれ乃あとをさへさそふ秋をもちゝふ山風

暮秋風

吹よりは冬にうつらんおもへはや秋のなこりの嵐の音そ

暮秋露

長月はなをなかきよのことゝおもへとも過ゆく秋のいつくの風

閑路暮秋

あの雨にくれ行秋のなこりをも袖の露ほさしな秋はうつりかはらん

九月盡

せき路をこえてゆくひとおしめ人あふさか山乃秋のなこりのまゝそ

秋はくれなゐにもみちのまゝをとめてもみち霜とかはしてもたゝよ

わしめらむとおもふ冬をもみち霜枯の中秋のなこりをしも

渓雲軒和歌集秋部畢

渓雲軒和歌集

冬部

初冬風

霜枯に野原は道をとふ冬の風きてまよふかそふる秋の山風

初冬嵐

冬来れはのこるもみちもちりやらんなとむら山風の吹かはまし

朝時雨

朝日影高根はなれゆく雲のしたにしくれてしなるゝ

嶺時雨

河音も雲のあらしにこゑまよひ山端にさらわけやしくれなるらん

原上時雨

吹雨に雲のあらしにさそはれて木の葉ふるらん時雨なるらし

閑時雨

むら時雨ふるさとかへるみちにしもさそはれかほに家ゐの袖

渡時雨

小松風にさそはれ秋のかれ行く衣も時雨ふるさむる夜の枕

落葉残秋

夕されは宮こは月に隅田河さしてゆくなる舟のなかなか

たちのこる木の葉にもみちのひとつちりぬ秋のなこりを枝にのこして

庭落葉
窓落葉
落葉浮水
残菊

[illegible]

雪中残雁

[illegible]

枯野朝
寒松
田霜

冬一

寒草霜
寒草
岡寒草
江寒蘆

氷

池水初氷

[illegible]

谷氷
河氷
湖氷
池氷

井堰氷
掛樋氷
橋ゝ氷
冬月

寒山月

[illegible]

寒夜月
寒夜明月
冬寒月
千鳥

[illegible]

浦千鳥

[illegible]

孤千鳥

濱千鳥

潟千鳥

湖千鳥

月前千鳥

池水鳥

水鳥剔代

水鳥多

綱代

綱代寒

神樂

豐明節會

鷹狩

夕鷹狩
霰
屋上霰
橋上霰
雪

[illegible]

冬 12

朝雪
庭初雪
都雪
里雪
暁望山雪
関路雪朝
関雪
古寺雪

[illegible]

窓雪
・なすこともなくてやくもさびしくもつめぬ窓にうつる白雪

水路雪
・舟の上に積りし後もちて筏士ぞさむき袖の上の雪

松雪
・宮木守ものも絶て降雪に松のすゑの雪の色

・をきこめて高砂の枝は白雪にちとせの色をまもるらん

檜雪
・うちわたす槙原山のみねまで雪のそこなる三輪の山本

常盤木雪
・ときはなる松のみどりも雪にうもれて色かはるらん

深雪
・此頃は積りて深き雪に人もかよはぬ山の奥の里

狩場雪
・狩人の跡もなきまでふりつもる雪にしるきしかの足跡

狩場霙
・夕まぐれ狩場の末にふりくる霙も寒き風の音

炭竈
・山人のなりはひのけふり立そふ炭竈や里とほき山の奥

・立のぼる煙も一村さびしき炭やき煙る里なりけり

爐邊閑談
・思ふどちまとゐの宵に埋火をかきおこしてや夜もすがら語らん

埋火
・けしきなく炭の埋火ふかくむすびつゝ夜のまどゐにかたる昔を

・ぬるも惜し夜のまどゐに埋火のもとによりそひて語る昔をしのびつゝ

・ふく夜さむきけしきに埋火のもとに語る夜すがらの友

・幾夜さむき炭のかげに埋火をかきおこしてのこるともし火

衾
・さむき夜の風やさむけき衾にかさねて寝ぬる夜半の床

佛名
・過去も今も未来も三世の佛の名をみなとなへつくしもせむ

依花待春
・うちいでゝ花まつ春の川べにて人をまちつゝ花をしのばん

早梅
・東風吹き垣根の梅の花のさきそめて

歳暮

市歳暮

路歳暮

歳暮松

歳暮鶯

雪中歳暮

除夜

[illegible]

漢雲軒和歌集

戀部

初恋

聞恋

聞聲恋

契行末恋

人傳恋

通書恋

難忘恋

被忘恋

待恋

逸書点
祈点
祈違点
違ふ舎点
顕点
留形身点
恥身点
見開厭点

被厭賤点
幼点
負点
絶点
近点
稀点
従門帰点
別点
濃軽点
春点
冬点

[illegible]

はきものをとりてふみけるをつみてに

[illegible]のなよのとかくしたるものの[illegible]

[illegible]なりとかかみ[illegible]なふのこるわうし

妻のもとひかけるる男のまうて来て[illegible]

あかはかもの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寄星恋

[illegible]

寄風恋

[illegible]

寄雲恋

[illegible]

寄煙恋

[illegible]

寄山恋

[illegible]

寄嶺恋

[illegible]

寄杜恋

[illegible]

寄杜恋

寄園恋

寄原恋

寄岡恋

寄橋恋

寄沼恋

寄池恋

寄瀧恋

寄河恋

寄浦恋

寄鴻恋

寄猿恋

恋沒

寄水恋

寄社頭恋

寄神祇恋

寄寺恋

寄門恋

寄隣恋
寄初草恋
寄葵恋
寄高爾恋
寄蓬恋
寄篠恋
寄木恋
寄椎恋
寄利事恋
寄鳥恋
寄鳥変恋

[illegible]

寄婚恋

[illegible]

寄賜恋
寄鳴恋
寄麝恋
寄麻恋
寄蝶恋
寄我拙恋
寄元結恋
寄夕向恋
寄稜麻恋

寄琴恋

寄笛恋

寄玉恋

寄絵恋

寄車恋

寄枕恋

恋車

寄舩恋

寄棹恋

寄硯恋

寄弓恋

寄懸樋恋

寄篇恋

寄答簀恋

寄掛恋

寄髪恋

寄帯恋

寄簑恋

寄莚恋
かひなしな志きしの宵の手まくらに月は荒たる床のさむしろ

寄鐘恋
わかれちはあかつきまちて待わひし入相の鐘のうきにまさりし

寄碇恋
ゆるかれてありぬ人をいかり縄ふかきちきりに志つめむと思ふ

寄標絵恋
ぬれしを形におもかけのこすしるしかね契りのはてを見るそうき

寄燈恋
くれまちしやみの夜をともし火のかけてもやみのともし火

寄高人恋
いかにせん雲井はるかにかけはしのかけてもよはぬ身をいとふる身

恋雲
わすらるる身は浮雲のはれやらぬ空にまよひて果もなき哉

恋山
おもひ入れは志けきの山に道もなしふかき心のおくそ知らるる

恋笛
笛竹のよに吹よせて夜半のよに吹よる風のおとはかり志て

おもふこと
まくらにもかたらぬおもひをいはて此山の谷の志たみつ

渓雲軒和歌集戀部畢

渓雲軒和歌集

雑部

雨
ふる雨も松の梢をさそひ出て嵐にかよふ窓の声かな

海
しほ風にこゑもすさまし浦波の汐にかへるはねやのかさな

杣山
ちよかけし御代のためしの杣人は宮木とよむする杣木ひくらし

日蝕
照月の雨の岩戸もあけのこる日の影の光さえこそ照す

嶺林猿叫
深山の嶺林の中をわけいれは猿の声のみむせふ嵐はし

杜
いかはかりかくるみの杜なるらんしくれにそむる木の葉しく哉

浮
松浦かたはる風かけて波ゆく船に山をわたりの浮寝かな

庵
おもひいれはうきことしけきやまの庵にすむかひもなき世の中の

隣
よそよりの煙の末はいつとなくとなりのかきに立まよひつつ

橋
関路雲
仙宮
園碁
寄市雑
嶺松
木
閑中燈
船

神代なりけるそうの名や国乃匠めの天乃浮橋
八重山乃あしたの雲をはらはせし東路さす日の関
舟とまれなりぬるそもかたの月はやさを立つるなるる
かりまつ秋の夜に松風もひきそえるみてれ琴の音
のうるはかるひ出れば市はやかりれ家もせん
絵をかれる松をはしめるとかるるみれもつきも
ふくとせるこの家おふれて家をもうたる世ふ程を桜の村立
畑をうえんと窓れとの山かるるそもんれ関ればしやをもる
おりあるる秋風はまりよ漕ふ波の八百合乃弥やうひく
いくたびうるるとむうてわるとてふあれはまるめたなのはせに
日れとれ風ふなひきて高志路のきはるるあやうり高

漁舟連波
春日宮山
海眺望
野行幸
苔為石衣
橋上苔
名所関
暮林鳥
鶴契遐年
江雪暮
江雨白鷺

えるるうらにおのう浦くあき出て波ふるるうの月れ鶴ふ
のうらの名裏ふるる山場ふむるるのぬきれ四ふうる
ひまはのしむしいはをきもたるしの糸を松浦の沖津島
せうしのやちの舟のうるきの波の音はるる鶴しる貴我
年はるる波うるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
むるる音れるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
ふるるせ寒の年ふるるるるるるるるるるるるるるるる
なのの色雪りるるるめて帰鳥なるひるるるるるるる
いるるるるるるる友鶴ふのるるるるるるるるるるる
るるれるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
白鷺の舟乃毛も苗ふ志母意河乃立る入江をさしてとん

楊貴妃
上陽人
陵園妾
王昭君
傀儡
岸頭傀儡
遊女
泊遊女
老女
樵夫

餞遣唐使
雙高くらのくまのうらを船ちかくこぎてはるかなる唐あれぬまろ追うを
旅行
夕旅行
旅宿雨
旅宿嵐
山旅
野旅

海旅

羇中送日

羇中月

羇中暁

旅泊

旅泊更夜

山家

山家隣

山家雲

山家水

山家音

山家橋

山家鳥

山家春

山居

田家　早稲刈そめて雨降ぬれば田家の人の手をかりて刈ぬ

田家鳥　[illegible]

山家歟　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仲原章

[illegible]

仲原章真浄寺にて[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大忠阿弥ちかう人のもとに時集しける

・言ふ家の道をも君に授くるのを下かきも百首侍り
百人一首をひきかへて

・今も世にのこる小倉の山松やありしにかしこきよみ人の家
ある人の心も残し置ひ侍りて

・ゆくへみち庭のをしへも苦しかりて世にもちひ出づる富の池水
古神宮百首とも名せ侍りける

・言の葉の数も百枝の松なれやおちぬ誰やたゆる
達磨大師のたゝむかし

・なに枝の月の末の心来すても白くあたなきの花ぬさ

人丸忌

・いまし残ぬうへて松もあかなくなる浦のやかと云の絵の作

夕鶴思

・思ひあまりいかにかなるらんうなひとをまつぬしの空をながめて

述懐

・ぬしはおもひをさてあるべき我法の道のさきへ人にしれぬ世をしれ

・とし暮れしや秋の住む門ゆかり世の光にも心もしれ

暁述懐

・道はなきに行くさき近き暁の鐘の声なかに聞ゆる鶏や鳴く鐘

述懐依人

・いやしき身となさぬ和歌の浦波にもまた人の老いせぬ我や行めん

聞法述懐

・耳にきく聞にのこるをもあるやいかにかしの声をも聞しへ

懐旧

・見ぬ世をも思ひそめつゝ今よりも近く住みつゝ

寄水懐旧

・河水の御月日なかれて行よの末なかのとなりて

寄船懐旧

・みちく我が手に遊びし川の船にかゝし時もむかしなりかん

田家懐旧

・うちむれて落穂ひろひしいにしへを思ふ世すぎし古家の里

寄老懐旧

・老の松むかしの友なきをん世の中にかゝるをはいはん

無常

なき跡を偲ひとまりて人数にかゝるもいひの浮世とも哉

我か門にまた知らぬ道とて大嵯峨にふくしへいひとやまくらん

きのふ知の雲みなつふかきはこれつゝみなきと世の中錦の林を

深観無常　ゆめのうちあすは若紫をさかゆく世を見る浪はたゝみ泡の世中

仲原章一周忌によみて侍りける

ひとめ見しとやくもぬる袖の上に村さめもしひ時雨なり

おなしく七周忌に

あはれ世にふるかひの数は七年めくりきて暮る日はたゝむなしきる

祝ひし一日暮まゐりて

七とせはなきしは夢かうつゝかと世の名残をみ心をとゝめむ

釈教

法にまよひしこころ人法の門ひらきしとは浮世の事なる

皆とくはうちとき離れし迷ひまては心のうちの庵なる

法の舟よるへはあるをもと人をわたさん越路の舟

醸しける人はまよひやらん麻の夜の内の珠なりしとめ

あさからぬ法の恵みしは山河のさと紀流をのぞみて洗はれ

恵みにひろいて又もこの世に生まるとは法の薬をあひけむ

むかしの庭にあらひにし雨にもたえぬあさき法はあらじや

きはめきてみる雲の端のと消ゆる鏡は法の世に曽根の月

さかしく法の誠はかはきなん人は間し鏡の影やさかのを

寄鏡釈教　後の世はうつせる罪の影をもや人玻璃の鏡に影をうつして

煩悩即菩提　世の中はうきをしるむてふ人も遊びの道に入るかひもなし

龍女成仏　とるみちにいつかのさとり雲はれてみなそこの海を照らす月影

如是我聞
雪朝聞法
本末究竟等
般若
涅槃
釋迦
藥師
菩薩
大日
地獄鬼
餓鬼鬼

畜生鬼
脩羅鬼
人鬼
天鬼
聲聞鬼
縁覚鬼
菩薩鬼
佛鬼
偸盜戒
邪婬戒
飲酒戒

妄語戒

慳貪戒

他力

不動

文殊

野寺僧帰

哀傷

神社

社頭松

外宮

神祇

よし河乃なかれハたとへかくしよいつはりおほき人の帯

津の国やむさほる人もおしむ心の宮を捨て猶

御法の海をむすひなかむれはなかなかにいとゝ世の中

かへるのゝたのまずか我あらは此世の後の人をみちひくそれ

見るたひにいとゝ光はあけ此秋のとゝまる事のかひ露の起郎

見渡せは秋の露ちる夕まくれ野寺に帰る僧の衣

こゝろなき石にも人をいはふ事の跡もむかしを忍ふ涙のみこそ

黒木もて作る宮この神垣はいく世の川のなかれ絶せぬ

波の上にあはれと月をなかむれは住吉の松

身もうきなき我よりさきにうけし井やかみの恵みを汲てそ知る

比叡の山こゝろのうちにすみてこそよろつ世の七乃神垣

寄鏡神祇

寄月神祇

石清水

伊勢

加茂

平野

さらぬ日乃光をやはらくる三笠山ちかひのある神の恵みや

あふさかや山をかけてもかしこきや神のむかしより七代の代を

いくちとせすめるみくらの御鏡の神代の風をうつしこそ

玉津島かけてしのふにのみのりも光のひかりを見るや

うつせみの世の霜にもいく世をかさねて祈る住吉の松

天の原まことの心をかけてみかみの御世をてらすとも見よ

いすゞ乃御裳すそ川に影とめて月も神路の山の端のうち

岩清水きよきなかれのはてもなくよろつ世かけて神の恵みを

庭の面すゝしくなれるみたらしの神の恵みもかけてそ思ふ

浦ちかくみつしほの浜をかけて世の人のねかひやなかれ神のかけとも

言の葉のよそにもなきは平野の神のかけとも

春日
大原野
吉田
出雲
玉津嶋
三輪
北野
稲荷
住吉
加茂

[illegible]

大宮　秋迎
二宮　菖蒲
聖真子　阿弥陀
客人　十面
八王子　千手
十禪子　地蔵
三宮　普賢
祝言
慶賀

[illegible]

八十賀　[illegible]

寄神祇祝

寄國祝

社頭祝

寄関祝

寄鏡祝

寄國祝言

寄松祝

夏祝

渓雲軒和歌集雑部畢

さ海ちふくる此詞をハ探る我ひろふ玉藻のひろひ河ぞ
河つめてこれと目とめ耳とゞむることハなかりけるさりや
浅き流ふ池の乃いひ出さ弁ハ河の孫とかや川営る名た
てる扨姉ハ紙のある嫁あれハこれ作の姉ハてふ神の
神まを翁霜乃おきそめて河のれとのきらんるよのかゝ
拾れ紙あつめて河川さふ思ひ浮雲集とふことふハ
名付けるなれ

享和二年戌初秋

壽禮庵浄月志るす

板路